

【総評】

グローバルな人材育成のための実践の場として

森山新（お茶の水女子大学）

経済協力開発機構（OECD）は「グローバル時代に求められる能力」として、①相互交流のために言語やテクノロジーを駆使できる能力、②文化などを異にするグループと相互交流できる能力、③自主的に行動できる能力の3つの能力を挙げている。この日韓大学生国際交流セミナーもグローバル人材育成を目指し開催されているが、第8回を迎える今回のセミナーは、過去のどの回にも増してこれらの目標を十分に達成できたと考えている。

第一に言語運用能力だが、両国学生はこれまでにまして言語の壁を越え、対話、発表が行われた。韓国側の学生たちの多くは日本語学科の学生であったが、1、2年生の学生や他学科の学生も多く含まれ、各自が決めたテーマについて討論、発表するのは容易なことではなかったが、それを乗り越え、日本語を用いていた。また日本側の学生は韓国語を専攻としていないため、韓国語での討論、発表は難しかったものの、今までになく事前の韓国語学習に積極的に参加し、歓迎会での自己紹介は全員が韓国語で行うなど、韓国語の使用と習得に熱心であった。

第二にテクノロジーの使用については、同徳女子大側でTV会議システムが導入されたことで、事前準備の授業にTV会議システムが用いられた。また授業外ではスカイプ、フェイスブックなどを用いて討論、準備を進めたことで、サイバー空間において国の壁を越え積極的に交流を進める環境を造成することができた。

第三に各グループはこれまで対話がきわめて困難で、タブーとされがちであった両国間の歴史的問題、すなわち従軍慰安婦問題、領土問題をはじめとした歴史教育問題、対日・対韓感情と報道・交流の役割、女性の社会進出といった問題を敢えてテーマとして取り上げ、これらについて自国中心の立場を越えグローバルな視点に立って対話が進められた。

第四にセミナーの準備、運営が学生の自主性に任せられ、学生主導により進められた。歓迎会、韓日文化体験、合宿、発表会、送別会などの運営は韓国の学生が担当した。また発表に際しては両国の学生が自ら率先し、夜を徹して準備を行っていた。発表内容は実習での成果と両国学生間の討論が踏まえられ、深い内容にまとめられていた。

最終日、日本へと旅立つ我々に対し、韓国側の学生全員が見送りに訪れ、別れを惜しみ涙を流しながら抱き合う両国の学生の姿に交流の成功を見ることができた。お互いにプレゼントを交換し、再会を誓った。韓国の学生に比べれば日頃引っ込み思案がちで感情を表に表すことの少ない日本の学生も、この時はあふれる感情を抑えることができないようだった。帰国後には、すぐさまフェイスブックやスカイプなどで思い出を語り合っていた。これらの姿には、今回のセミナーが今までのいつにもまして交流が深まったことを物語る

ていた。

セミナーは前半のホームステイやグループ実習、後半の3泊4日の合宿を通じて交流を深めていった。両国の学生たちは言語と文化、受けてきた教育の壁などを乗り越えながら夜を徹して話し合い、共通のゴールを模索していた。

韓国の学生たちが思いの限りを尽くして自らを迎えるその姿に、日本の学生たちは大きく感動し、自らも変わっていった。とかく距離を置いてしまう日本の学生だが、このセミナーではそんな姿は見られず、一日でも一時間でもいっしょにいたい、いっしょにしようとする日本の学生の姿があった。スキンシップに慣れていない日本の学生も後半には平気で韓国の学生と手をつなぎ、抱き合っていた。

また38度線近くの統一展望台や朝鮮戦争展示館を訪れ、南北分断の現実を目の当たりにした。日韓の学生が一緒になっての訪問は、異なった視点から南北分断の悲劇を見つめさせることにもなった。何故韓国が分断の悲劇を被らなければならなかったかを考える時、ドイツ同様、日本が分断されてしかるべきところを、韓国が一時日本の植民地であったがために、またしても悲劇は日本でなく韓国に訪れたということを感じることとなった。日本の学生たちは南北分断に対する認識を新たにしていた。

日韓両国の間には未解決な問題が未だ多く残されている。こういった問題はお互いが自国優先の心を持っていくら話し合いを重ねても解決できるはずはない。今回、両国の学生たちが相手を理解し合おうというグローバルな心を持とうと努めながら、真摯に話し合う姿勢を持つことで、これまで解決が困難であったこれら問題に一定の解決策が見いだされ、提言がなされた。今後さらに彼らがグローバルな心を抱いた人材へと成長することで、両国のこれら問題が解決に向かうことを期待してやまない。

最後に、今回のセミナーを成功に導くため同徳の学生の陰で日夜苦勞して下さった金榮敏先生をはじめとした同徳の先生方、日本の学生を暖かく迎えて下さった学生のみなさん、ホームステイを受け入れて下さったご家族の皆様にも心から感謝いたします。また安全面などご協力いただいた本学国際本部、国際交流チーム、グローバル教育センター、グローバル文化学環の皆様にも心から感謝いたします。